

病虫害発生予察情報(7月)

京都府病虫害防除所より、7月の発生予察情報が発表されましたので、抜粋して掲載いたします。

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	葉いもち 紋枯病 セジロウカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	やや多(多) やや多(やや多) 並(並) やや多(やや多) 並(並)
ブドウ	べと病	並(やや多)
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 アブラムシ類とモザイク病 アザミウマ類 ハモグリハエ類	並(並) 並(やや少) やや少(やや少) 並(やや多) やや少(並)
ウリ類	べと病 炭そ病	やや多(やや多) 並(並)
キュウリ	斑点細菌病	並(少)
ネギ	ネギアザミウマとネギえそ条班病 ネギハモグリハエ	やや少(やや少) 少(やや少)
野菜全般	ハダニ類	並(並)

営農タイムリー

イネ

1. 葉いもち

予報内容 発生量 : 平年比やや多い(前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 補植用苗が葉いもちの発生減となるので、放置したままの苗は早急に抜き取り処分する。
- (2) いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合は注意する。
- (3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田は注意する。



病斑



葉いもち被害

2. 紋枯病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い(前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- (2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行う。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (5) チッソの多様を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。



紋枯病斑



1. いもち病 防除剤（予防）

・ オリセメト 粒剤 3～4kg/10a	葉いもちには初発の10日前～初発時 穂いもちには出穂3～4週間前 収穫14日前まで / 3回
・ コラトッス 粒剤5 3～4kg/10a	葉いもちに対しては初発10日前～初発時 穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで / 2回
・ コラトッパ パック10～13個 <small>ジャンボP</small> (500～650g) / 10a	葉いもちに対しては初発20日前～初発時 穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで / 2回
・ コラトッパ 豆つぶ 250～375g/10a <small>ココロ</small>	葉いもちに対しては初発10日前～初発時 穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで / 2回

2. いもち病 防除剤（治療効果のある薬剤）

・ オリブライト 250G 豆つぶ 250g/10a	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで / 1回 [いもち病:穂枯れ(ごま葉枯病菌):紋枯病]
・ オリブライト 1kg粒剤 1kg/10a	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで / 1回 [いもち病:ごま葉枯病:黒しゅ病:白葉枯病:穂枯れ(ごま葉枯病菌):穂枯れ(すじ葉枯病菌):墨黒穂病:紋枯病:葉鞘腐敗病]
・ ブラシンフロアブル 1000倍	収穫7日前まで / 2回 [いもち病:ごま葉枯病:もみ枯細菌病:稲こうじ病:褐条病:内穎褐変病:変色米(アルタナリア菌):変色米:穂枯れ(ごま葉枯病菌):墨黒穂病]

3. 紋枯病 防除剤

・ モンカット 粒剤 3～4kg/10a	出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで / 3回以内
・ モンカットフロアブル 1000～1500倍	収穫14日前まで / 3回以内
・ モンセレンフロアブル 1500倍	収穫21日前まで / 4回以内
・ リンパー 粒剤 3～4kg/10a	収穫30日前まで / 2回以内
・ オリブライト 250G 豆つぶ 250g/10a	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで / 1回
・ オリブライト 1kg粒剤 1kg/10a	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで / 1回

1. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年比やや多い(前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

ツマグロヨコバイ

イネ萎縮病、黄萎病、矮化病を媒介する一方、秋期の吸汁害も無視できない。

形態 : 成虫の体長雄4.5mm、雌6mm内外。雌は全体が緑色であるが雄は翅端が黒色をしている。卵はバナナ型で長さ約1.2mmで葉鞘組織内に数粒の卵塊として産卵する。幼虫は5齢を経過し老齢になると雌は黄褐色、雄は淡黒色となる。

生態と被害 : 年4回発生が主体で一部5回発生。主に4齢幼虫で越冬し、第1世代幼虫はスズメノテッポウでよく繁殖する。ウイルス病は第1世代幼虫または第2回成虫が主に媒介し、吸汁害は主に3世代幼虫または第4回成虫による。



左・雄、右・雌



幼虫

3. ツマグロヨコバイ 防除剤

I: 3A

- MR.ジョーカー EW 2000倍 60~150L/10a 収穫14日前まで / 2回以内
[イナゴ類:ウンカ類:カメムシ類:コブノメイガ:
ツマグロヨコバイ:フタオビコヤガ]

I: 4A

- スタークル 豆つぶ 250~500g/10a 収穫7日前まで / 3回以内
[ウンカ類:ツマグロヨコバイ、
カメムシ類は250g/10a]

I: 4A

- スタークル 粒剤 アルバリン[®] 3kg/10a 収穫7日前まで / 3回以内
[イネドロオイムシ:イネミズゾウムシ:ウンカ類:
カメムシ類:ツマグロヨコバイ:ニカメイチュウ]

I: 4A

- ダントツ 粒剤 3kg/10a 収穫7日前まで / 3回以内
[ウンカ類:ツマグロヨコバイ:ニカメイチュウ、
カメムシ類は3~4kg/10a]

I: 14 I: 1A

- パダンバッサ 粒剤 3~4kg/10a 収穫30日前まで / 5回以内
[イネツトムシ:イネドロオイムシ:ウンカ類:
ツマグロヨコバイ:ニカメイチュウ]

ウリ類

1. ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや多(やや多)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20~25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

きゅうり ベと病

病徴と診断 : 子葉・本葉に発生する。子葉では、初め水浸状の斑点ができ次第に拡大して淡褐色に変り、葉は薄くなり乾燥すると萎凋する。本葉では初め淡黄色の小斑点から、のち葉脈に囲まれた多角形・黄褐色の病斑になる。激発すると葉全体が葉縁から巻き上って枯れる。**多湿条件で葉裏に暗灰色のカビが生える。**

伝染経路と

発病条件 : 病斑上に形成された分生胞子が風等で飛散し、葉上に水滴などがあると発芽して遊走子を生じ、気孔から侵入する。**湿度が高く肥切れ・樹勢の衰えた時に発生しやすい。**

防除の

- ポイント** :
- **ハウス栽培では換気をよくし、過湿防止に努める。**
 - **肥切れしないように、施肥管理に努める。**
 - **薬剤防除は発病初期に重点をおく。**



■ きゅうり ベと病の防除体系例

発病前は

F: M01(M) **グリーンガッツ**
[エコショット+銅]
[1000倍 収穫前日まで/-]

F: 21(C4)

ライメイ フロアブル [2000~4000倍 収穫前日まで/4回以内]
ランマン フロアブル [1000~2000倍 収穫前日まで/4回以内]

予防剤を **ローテーション** 散布

F: M03(M)

ペンコゼゴ フロアブル [500~1000倍 収穫前日まで/3回以内]
ペンコゼゴ 水和剤 [600~800倍 収穫前日まで/3回以内]
シマン 水和剤 [600~800倍 収穫前日まで/3回以内]

発病が認められたら

F: U17(U) **ピシロック** フロアブル
[1000倍 収穫前日まで/3回以内]

F: 40(H5)
F: M05(M)

プロポーズ
顆粒水和剤
[マモロット+ダコニール]

[1000~1500倍 収穫前日まで/3回以内]

治療剤を加えた **ローテーション** 散布

F: 27(U)
I: UN
F: M03(M) **カーゼートPZ** 水和剤
[シモキサニル+マンゼブ]

[1000~1500倍 収穫前日まで/3回以内]

F: 24(D3)
F: M01(M)

カスミンボルダー
[カスミン+無機銅]

[1000倍 収穫前日まで/5回以内]